

釧路製紙業の産業社会史： 本州製紙・王子製紙釧路工場従業員とその家族の聞き取り

平田 亮介^{※1}・中山 大将^{※2}

An Industrial Social History of a Paper Manufacturing in Kushiro: Interviews on a Familial History of a Retired Employee of Honshu-Seishi and Oji-Seishi

Ryosuke HIRATA^{※1} and Taisho NAKAYAMA^{※2}

1. はじめに

2021年に日本製紙釧路工場は操業を停止した。2002年の太平洋炭砒の閉山に続き、釧路地域の主要産業の衰退を物語るできごとであったことは言うまでもない。本稿の目的は、同じく釧路製紙業の一翼を担い現在も操業を続ける王子マテリアの前身である王子製紙釧路工場およびその前身の本州製紙釧路工場に働いた従業員とその家族への聞き取り調査を基に、釧路製紙業の産業社会史の一端を叙述することにある。

日本の歴史研究において口述史は正当に評価されてこなかったとされるものの、大門正克(2017)が示すように、郷土史家やノンフィクション作家などの業績も含めれば多様で多層的な蓄積があるのもまた事実である。そうした中には、聞き取りをした時点では衰退していた産業に、かつて従事していた人々を対象としたものも少なくない。大門(2017)に取り上げられたもののうちでも、中国人強制連行被害者(野添憲治)、朝鮮人徴用工(金賛汀、林えいだい、朴慶植)、女性坑内労働者(森崎和江)、「からゆきさん」(山崎朋子)、朝鮮人女工(古庄ゆき子)が、これに該当する。

〈歴史〉という概念それ自体が、現在と過去を分かち線引きによって成立する以上、〈過去〉となってしまう産業従事者が口述史の対象になるのはごく自然なことである。しかし、大門が挙げたような1980年頃までの口述史は、従事していた産業への関心はそれほど強くはなく、叙述者自身が聞き取り対象者を産業史の中に位置づけるという姿勢が明確ではない。植民地支配被害者や〈女性〉というマイノリティの〈生〉を描き告発することに関心の中心があるのであり、従事産業は一種の〈舞台〉に過ぎなかった。

しかし、その後は、従来の経済史や経営史とは異なる角度から産業史に口述史を導入する流れが生まれている。その産業が地域や住民とどう結びついていたのか、そしてそれが今ではどう〈記憶〉されているのか、という観点からの研究である。こうした流れは歴史研究からのみ生まれ出たのではなく、社会学などの

研究分野が研究対象としていた現役産業が時間の経過とともに衰退産業となり〈歴史化〉され、歴史研究と社会学研究の接近や協働が近年では顕著に現われるようになった。炭砒研究はその典型例であり、嶋崎尚子(2018; 2020)は口述史も組み込んだ総合的な産業社会史研究と言える。釧路については、前述の太平洋炭砒を扱った嶋崎(2018)や尺別炭砒を扱った嶋崎(2020)のほかにも、石川孝織(2016)による阿寒硫黄砒山に関する口述史なども積み上げられている。

本稿は、それに続き炭砒と並び釧路の主要産業としての地位を占めてきた製紙業の産業社会史研究のための口述史の試みである。本稿では、経済指標では見えてこない、産業が従業員や家族、住民の〈生〉に与えた質的影響について考察する手がかりを築きたい。

釧路の製紙業の歴史については、労作『釧路の製紙』(釧路製紙工業史研究会 1987;1990)が刊行されている。同書は、十條製紙や本州製紙の関係者も編纂にかかわっているほか、下巻の序で「本書は工業史を中心にしてありますが、地域史、広い意味での文化史まで取込んだ」(釧路製紙工業史研究会 1987, 12)とあるように、従業員の生活史や周辺地域との関係性まで叙述されている。このため、内容には重なる部分もあるものの、同書と本稿の大きな違いは、第一に、従業員一家の視点からその経験を叙述すること、第二に、同書刊行時にはまだ起きていなかった王子製紙との合併以後も含めた生活経験の語りを論じることにある。

本稿における聞き取り対象者は、本州製紙および王子製紙釧路工場の従業員であったA氏、A氏の妻であるB氏、A氏夫妻の長女であるC氏、A氏夫妻の次女であるD氏の4名である。聞き取り対象者の選定は機縁法によるものであり、代表性を考慮したわけではなく、あくまで事例研究である。聞き取り調査は、2021年から2022年にかけて断続的に実施した。

※1 釧路公立大学(卒業生) Kushiro Public University of Economics (graduate)

※2 釧路公立大学 Kushiro Public University of Economics

2. 釧路と製紙業

2-1. 富士製紙釧路工場から日本製紙釧路工場へ

釧路の製紙業の始まりは、1900年(明治33年)に釧路町天寧に設立された「前田製紙合名会社」である。この前田製紙の操業は、北海道の近代的製紙業の始まりでもあった。1898年(明治31年)に「北海紙料株式会社」へ改組、1906年(明治39年)に富士製紙株式会社に買収され「富士製紙株式会社第四工場」となるものの、1913(大正2)年の大規模な火災により、建物、原料、製品すべてが消失、再建の目はたたなかった(釧路製紙工業史研究会 1987, 60-78)。

1916年(大正5年)に、樺太工業社長の大川平三郎が「北海道興行株式会社」を設立、1918年(大正7年)に鳥取地区に釧路工場の建設が始められ、翌1919年(大正8年)北海道興行株式会社は富士製紙と合併、1920年(大正9年)に「富士製紙釧路工場」が操業を開始する(釧路製紙工業史研究会 1987, 89, 97)。1933(昭和8)年に富士製紙、樺太工業は王子製紙と合併、第二次世界大戦後はGHQによる財閥解体が進められ王子製紙は解体、苫小牧製紙、十条製紙、本州製紙に分割され、王子製紙釧路工場は「十条製紙釧路工場」となった(釧路製紙工業史研究会 1987, 155, 275-276)。

1993年(平成5年)に十条製紙は、山陽国策パルプと合併、社名を「日本製紙」へと変更、2001年(平成13年)には大昭和製紙と経営統合し社名を「日本ユニパックホールディング」としたが、2013年(平成25年)に「日本製紙」へと社名を戻す。2004年(平成16年)には、道東初の電力事業用発電所の卸電力火力発電所「釧路IPP」も稼働させた(日本製紙釧路工場100年史編集委員会 2020, 102-152)。前述の通り、日本製紙釧路工場は2021年に操業を停止し工場を閉鎖した。

2-2. 本州製紙釧路工場から王子マテリアへ

第二次世界大戦後の財閥解体で生まれた本州製紙は、当初は釧路に工場を有していなかった。

1950年(昭和25年)に始まった朝鮮戦争により製紙パルプ産業は好況を迎え、増産・増設を進めるが、休戦後は反動で不況になり業績は大幅に悪化する。

この業績不振を打開するため、当時王子製紙(旧・苫小牧製紙)副社長であった木下又三郎が新たに本州製紙社長となり再建を担うことになり、立地調査、原木供給量、原木の集荷距離、港湾などへの輸送路、用水・排水などの諸条件に加え、釧路市の熱心な誘致活動の結果、建設適地として釧路市大楽毛地区が選ばれた(本州製紙株式会社釧路工場 1969, 24-30)。

1959年(昭和34年)に釧路工場は完成、1965年(昭和40年)には当初計画された3期工事が完了、3台の抄紙機が完成し、生産力は日産1,000トンにいたり(本州製紙株式会社釧路工場 1969, 92)、1972年(昭和47年)に計画された4期工事では、1台で従来の3台分の生産量を誇る4号マシンの建設が計画され、釧路工場は本州製紙の主力工場となった(王子製紙 1999, 76)。

釧路工場の操業方式は、建設当時、国内では数少ない三交替制での連続操業で年間稼働日を原則350日とするものであった。夏季にボイラー検査も含め、2週間の一斉休転(シャット・ダウン)を実施した。そのため、保全部門以外は公休日と有給を合わせると1週間以上の長期休暇を取ることができた。また、学校の夏休み期間と重ねたため、家族サービスも兼ねていた。この制度は「業界初の夏休み」として北海道新聞でも紹介された(本州製紙株式会社釧路工場 1969, 43, 73)。

1996年(平成8年)に本州製紙は王子製紙と合併、本州製紙釧路工場は王子製紙釧路工場となり、2001年(平成13年)に王子製紙、高崎三興、中央板紙、北陽製紙の営業部が統合し「王子板紙」を設立、翌2002年(平成14年)には王子製紙の板紙製造部門と前記3社が合併し「王子板紙」として生産と販売を一元化、2012年には社名を現在の「王子マテリア」に変更する。¹

3. 職場生活

3-1. 現場での経験

A氏の略歴は以下の通りである。A氏は、1947年(昭和22)年に釧路市で生まれ釧路工業高校機械科を1966年(昭和41年)に卒業し本州製紙釧路工場に就職した。入社後はまず製造部に配属され紙の抄造に従事していたが、1970年(昭和45年)に製造部長室試験担当(のちの研究技術部、以下「研究技術部」)へ配置転換となる。1971年(昭和46年)に旧王子系5社で設立した五社共同研究会(1972年以降は「日本紙パルプ研究所」)に出向し、1973年(昭和48年)に復職する。1999年(平成11年)に環境管理室へ配置転換となり2007年(平成19年)に定年を迎え、退職後は嘱託としてその後2年間、引き続き環境管理室に勤務した。

入社直後に配属された製造部では中芯(段ボールの内側の紙)を製造していた3号抄紙機を担当していた。工場にはライナー(段ボールの外側の紙)を製造する機械が2台、中芯を製造する機械が1台あり、ライナーのほうが中芯よりも厚くて丈夫な紙であったため、抄造

¹ 「王子マテリア株式会社 会社概要」「王子製紙(旧王子製紙工場)」王子マテリア Web サイト、
<https://www.ojimatéria.co.jp/corporate/profile/index.html>、<https://www.ojimatéria.co.jp/corporate/profile/ojipaper.html>
 [最終閲覧日: 2022年06月03日]。

スピードが遅く製造に要する時間が長く、ライナー担当であれば、夜勤時には仮眠をとることもできたが、中芯はライナーよりも薄く抄造スピードも早いので製造時間が短く、そのうえ製造中に紙が切れるといったトラブルが頻発したため仮眠をとることは困難であった。しかし、トラブルが起こるたびに休憩中でも職場一丸となって対処するため、3号抄紙機の職場では問題対処能力が鍛えられるとともに強い連帯感も育まれていった。

勤務形態は6日働いて1日もしくは2日休みという三交替制であったが、6日連続の夜勤時の身体的負担が過大であったため、A氏は入社5年目に体調を崩してしまい、研究技術部へと配置転換されることになった。研究技術部では3号抄紙機とは異なり、科学知識が重要となるため日々知識の習得に励んだ。

配置転換から1年半後、王子製紙春日井工場に設置される「無公害パルプ製造」のパイロットプラントを運転するための基礎実験要員として旧王子系各社1名ずつの増員招集があった。25歳以下の人員という条件があったため、本州製紙からは一番新しい工場であった釧路工場が選ばれ、A氏は本州製紙代表として東京の五社共同研究会へ出向することになった。

各社代表として選ばれた5名のうち3名が現場上がりであったため、A氏と研究所上りだったもう1名が、マニュアルのあるものから、経験や勘が頼りになるものまで他の3名に試験の手順・手法を教え込んだ。

試験は王子、本州、十条の研究所と東京大学の試験場で行われた。東京大学の職員待遇で生協の組合員となったため、当時復旧中だった安田講堂の地下にあった購買で、A氏も5%割引で書籍を購入した。A氏と同僚たちは各社が用意した寮に住んでいたが、互いの寮に遊びに行くなど私生活でも交流を持った。

釧路には1年半後に戻り、翌年結婚した。結婚するための帰釧であった。A氏は本州製紙釧路工場への復職後の10年間、大気ガスや悪臭などの環境測定・対策や現場からの依頼分析、紙の成分の分析を担当していた。その次の10年間は、印刷用紙の塗料の試験研究を担当し、新技術や新製品の開発に尽力した。そしてその後は、ライナーの試験研究を担当した。

1999年(平成11)年に環境管理室に転属となり、定年退職後の嘱託期間も含めて10年間、同室に勤務した。同室では、操業現場のパトロールやチップ粉塵・騒音・悪臭などの地域住民からの環境苦情の対応、官公庁や市への提出書類の作成、環境ISOのマニュアル作成、漁協とのコミュニケーション、工場周辺地域の一般家庭の環境モニター資料の作成、環境トラブルの市・漁協への報告・対応、廃棄物の管理などさまざまな業務を担当した。現場でのトラブルや環境苦情

が発生すると昼夜休日関係なく呼び出されることもあり、精神的に気が休まる時がなかった。薬品流出の電話で夜中に呼び出されたこともあった。A氏がさまざまな業務に対応できたのは、それまでの業務で経験と知識、そしてそれまでに取得した各種資格のためであった。そして2009年(平成21年)10月に退職する。以上のように、A氏は出向も含め4つの職場を経験したが、いずれの職場でも前の職場での経験・知識が役立ち、サラリーマンとしては充実した会社生活を過ごせたというのが自己評価である。

A氏が業務の中でも思い入れのあるのが、塗料のコストダウン試験である。

1980年代末、A氏は印刷用紙の塗料のバインダーとして使う加工澱粉を、コストダウンのため自家変性できないかの検討に取り組んだ。塗料用の加工澱粉は、澱粉製造会社から低粘度に加工された製品を購入するのが一般的であったが、より安価な澱粉によるコストダウンを試みることにした。A氏は、工場の資材納入代理店からの情報から、東南アジアから関税の安い工業用澱粉を輸入し、それを自分たちの使いやすい粘度になるように酵素で自家変性することを考えた。

ラボテストでは粉まみれになりながら、500kgのフレコンバッグ1袋を使用した。ラボテストが終わり、現場テストで目標に合う澱粉ができ上がった時は、飛び上がるほど嬉しかったとA氏は語る。この技術は本州製紙の他工場や合併後の王子製紙の工場にも技術移転されることとなる。

3-2. 従業員への福利厚生

A氏の職場生活をめぐる語りは従業員への福利厚生にも及んだ。本州製紙釧路工場の福利厚生や社宅生活、生活環境については、釧路製紙工業史研究会(1990)にも叙述があるものの、本稿ではA氏一家の語りの内容を中心として叙述することとする。

年1回開催される従業員慰安運動会は、従業員家族や協力会社従業員家族も参加し、職場対抗競技や家族競技が数多く催された。昼休みを利用して行われた豪華賞品が当たる福引き抽選会は一番の目玉企画であった。一等の賞品がプラズマテレビだったこともあるほど金額規模も大きなものであった。夏の盆踊りと職場対抗仮装大会には各職場の夜店も設けられており、子どもたちも、この夜店を楽しみにしていた。

健康保険組合との共催行事もあり、夏のバスハイクや冬の餅つき・クリスマス会、そして氷上運動会など、家族向けのレクリエーションが数多く催された。

しかし、これら行事の多くは王子製紙との合併後に廃止されてしまった。会社が福利厚生費を見直し、通信講座の受講やスポーツジムなどいくつかのコースの中

から自由に選ぶという個人主義的なもの変わった。選択したいコースが何もない場合は社員口座の預金に回すこともできた。「独身者にも妻帯者にも公平ではあるという時代の趨勢も感じるが、果たしてこれでもいいのかと思う」というのがA氏の思いである。

本州製紙には本社広報室で作る社内報『ニュース本州』があり、これとは別に釧路工場も『ニュース釧路』という社内報を発行していた。

『ニュース釧路』は、工場の従業員が編集者となって毎月発行しており、1班8人の3班が交代で発行していた。ひとつの班には必ず女性従業員が含まれることになっていた。任期は1年で、工場の全従業員が一度は担当することになっていた。A氏は入社4年目に担当した。原則的には業務扱いされ勤務時間内に行なう作業であるが勤務時間外にまで及ぶこともあった。

紙面の内容としては、工場長ポリシーや部課長方針、各職場のトピックス、工場のレクリエーションなどの工場内の事柄だけでなく、家庭欄、慶弔欄もあり、時には地域の人物が登場することもあった。

刊行までの工程は、まず編集会議を開き、シリーズもの以外の企画は毎回各班で考案する。企画と担当が決まれば、文字数、締め切りを決め原稿依頼をする。原稿が戻ってきたら、見出し、割りつけのレイアウトをした後、印刷所へ発注する。自分たちで写真を撮影して挿入することもあった。グラ刷りができたら校正作業をし、問題がなければ、本刷りを開始する。A氏には出版社並みの作業をしていたという自負がある。

刷り上がった『ニュース釧路』は、各職場や厚生施設、社宅の各戸に配布された。B氏は結婚当初から数年分の『ニュース釧路』を保存しており、B氏、C氏、D氏がそろって映った表紙もある。社内報づくりの経験が後には職場新聞づくりや組合の機関誌づくりに役立ったとA氏は回想する。

こうした社内活動のほか、雄別炭砒の元従業員の受け入れもA氏には印象深い出来事であった。雄別炭砒は太平洋炭砒とともに釧路炭田の有力炭砒であったが、1970年(昭和45年)2月に閉山した。A氏の周辺にも親が雄別炭砒で働いていた従業員がおり、その落胆ぶりはA氏も心配するほどであった。

A氏が製造部長室へ配置転換する頃、閉山した雄別炭砒の元従業員が釧路工場に採用された。釧路工場に採用された元雄別炭砒従業員の中にはA氏と同じ歳の若い者もいた。A氏によれば、はっきりした記憶はないが、わかっているだけで10人くらいはいたという。炭砒も三交替勤務で電気設備や機械のメンテナンスなどの仕事もあるため、工場としても受け入れやすかったのではないかとA氏は解釈している。「長年同じ職場で働いていると、中途入社だとか、元どこ出身

だとかは関係ないらしい。それが釧路工場の社風ではないか。」とA氏が語るように、雄別炭砒からの転職組であるかどうかは、職場では大きな問題とはされなかったとA氏は認識している。

A氏は、本州製紙の本社や別工場から赴任してきた人々との交流から、こうした福利厚生や連帯感、一体感の重視は釧路工場だけの特徴ではなく、本州製紙全体の社風だったのではないかと推測している。

また、A氏は入社2年目に前述の木下又三郎を見かけている。工場の運動会にお忍びで来ており、グラウンドに置かれた椅子との間をリレーで折り返す競技の時に、その椅子に座っていたのが木下だったので、A氏は驚いたのであった。写真で見る木下は、いかにも技術屋らしい厳しい顔だったが、実物は柔和な老人という印象であった。

木下は「紀六良」というペンネームで「釧路工場讃歌」を作詞し、この曲は今でも職場の送別会やOB会など、機会があるごとに歌い継がれており、工場の「ソウルソング」だとA氏は語る。なお、木下の逝去時の『ニュース釧路』の追悼記事ではこの「釧路工場讃歌」の歌詞も掲載された(ニュース釧路編集部1977a)。

こうした経験も、A氏が本州製紙の社風として家族的な側面を強調することの背景のひとつである。

4. 社宅生活

4-1. 「本州村」

本州製紙釧路工場には社宅も併設されており、生産と生活の場が半ば一体化していた。

工場の敷地内は、市道を挟んで生産活動区と厚生施設区に分かれていた。厚生施設区は関係者から「本州村」と呼ばれていた。A氏が結婚した頃の「本州村」の様子は、屋上付き4階建てのアパートが16棟あり、その内2棟は管理職用で、それに加え4階建て独身寮が2棟あり、最盛期には1,700人ほどが住んでいた。厚生施設区には、診療所、理美容室、大型スーパーの本州ハイマート、こぼと幼稚園、来客の接待・宿泊用の本州クラブ、社員クラブ、会社が経営する居酒屋はと、児童公園、広場のほかスポーツ施設として、体育館が2棟、野球グラウンド、アイスホッケーリンク2面、子供用リンク、ゴルフ練習場などがあった。ほとんどの施設は従業員専用であるが、理美容室、本州ハイマート、幼稚園、居酒屋はと、子供用リンクなど一部の施設は、近隣住民も利用できた。

以下、A氏の記憶の範囲でこれら施設の概要について記しておく。

(1) 本州ハイマート

当初、従業員向け商業施設として「本州ストアー」

が敷地の中央で営業していたが、1973年（昭和48年）に国道38号線沿いに移転し大楽毛初の大型スーパーとして営業を開始したため近隣住民にも喜ばれた。

(2) 診療所

第一次南極越冬隊の医師であった中野征紀が所長を務め、内科、外科など様々な症状に対応し、風邪や軽度の怪我であれば、市街地の病院までいかずに済んでいた。1983年（昭和58年）頃までは歯科の医師も常駐していた。中野は工場の管理者社宅に夫妻で住み、昼夜を問わず診察・処置をしてくれたという。

1978年（昭和53年）の逝去時には工場葬が行われ『ニュース釧路』掲載の工場長の甲辞の中では、家庭菜園の野菜のお裾分けの思い出話のほか、深刻な病気の患者には本人の心理面にも配慮し慎重に東大病院への入院手続きを進め、その際の中野の診断と東大病院の診断がほぼ一致していたという話も紹介されている（ニュース釧路編集部 1978, 8）。

釧路製紙工業史研究会（1990, 445-446）では「社宅の生活」の最初の項で、「こんなへんぴな所にいるより早く内地に帰りたい」という従業員の妻たちに対して、海産物の干物を作り「内地」の親族知人に送るように指導したところ干物づくりに熱中するようになり、精神的不調を訴える患者がいなくなったという話が紹介されている。中野は南極越冬隊の経験が強調されるが、満洲や樺太での勤務経験も有しており（ニュース釧路編集部 1977b, 13）、僻地での生活が人間の心身に及ぼす影響を熟知していたことが、社宅住民たちの信頼を得る要因のひとつになっていたと言えよう。

診療所には内科、外科、歯科があり、それぞれ専門医がいたとされる（釧路製紙工業史研究会 1990, 453）ものの、外科専門の中野が内科の患者まで引き受けていたとA氏が記憶している背景には、実際の中野が社宅住民の心身の不調に対して総合的に診療していたことから抱いた信頼感があると考えられる。

(3) 居酒屋「はと」

会社が経営していたため給料から料金を差し引くこともできた。単身赴任で釧路に来ている管理者の食事や、勤務後や結婚式などのイベント後の飲み会、出張者の接待で利用するなど従業員の憩いのと社交の場となっていた。当時は夜勤の際に、はとのおにぎりを持参する独身者が多かったという。店名の由来は本州製紙の社章の鳩のマークである。

(4) こばと幼稚園

転勤してやってきた従業員の子どものために工場操業時に会社によって設立されたため会社が経営する幼



図1 本州製紙社宅周辺地図
出所：国土地理院地図電子国土Web [2022年06月04日] に筆者がA氏からの聞き取りに基づき加筆（上が北）。



図2 本州製紙社章
出所：A氏の所有物を筆者が撮影（2021年）。

稚園として始まった。初代園長は元公民館館長が勤めた。C氏とD氏は第二次ベビーブームにあたり両者の在園時には大勢の園児が通っていた。園児数のピークは1976年（昭和51年）であり、当時は大楽毛地域唯一の幼稚園であり従業員家族以外も通園でき社内・社外合わせて約200名の園児が通っていた（釧路製紙工業史研究会 1990, 455）。社内・社外問わず、入園料や保育費は市内の幼稚園の半額であった。園庭を開放しており、子供たちがいつでも遊べる場所であった。居酒屋はと同様に社章の鳩が名称の由来である。

(5) 社員クラブ

社員クラブには、社員用の麻雀や将棋などができる娯楽スペースや出張者用の宿泊スペースなどがあったほか、職場の歓送迎会も行われた。第二体育館となげられ、結婚式を執り行なう神殿も後に増設された。

(6) 本州クラブ

本州クラブは役員などの宿泊施設であり、専門の料理人が配置され宴会や接待の場となった。

(7) 独身寮

独身寮は1人部屋と2人部屋があり、A氏は2人部屋に約3年間、1人部屋には3年半入寮していた。1階には管理人室や食堂、娯楽室、浴室、洗濯室があった。家賃は無料で食費のみが給料から差し引かれていた。

(8) 体育館

A氏夫妻の結婚式は会社の第二体育館で行われた。予約が混み合っており結婚式の手配には時間がかかった。A氏が入社したのは工場が創業して7年目であり、当時釧路工場の従業員の平均年齢は低く、1970年前後は結婚適齢期者が多い時期であった。毎月のように結婚式があり、月に5回も結婚式に出席するような者もいた。会社が1970年(昭和45年)に新たに第二体育館を建て、社員の結婚式が挙げられるようになっていた。普段は体育館として使用し、結婚式の時は「本州会館」と名前を変えて式場として使用した。

北海道では、新生活運動の一貫で結婚式は招待制ではなく会費制で行なうようになっており、当時は市内の式場で行なうと会費が2,000円くらいであった(釧路製紙工業史研究会 1990, 448)が、本州会館では社員の負担を減らすため会費を800円に設定していた。ただし、1974年(昭和49年)にA氏夫妻が結婚式を挙げた時には、950円まで値上がりしていた。どの結婚式も祝賀会の出席者は工場の従業員が大半を占め、出席者数は300人~350人程度が一般的であった。

結婚式は社員クラブに新設された神殿に鳥取神社の神主を招いて挙げた。当時は新郎新婦側が直接神社に依頼していた。新婦のお色直しも社員クラブの和室で行ない、ドア to ドアで会場へ行けるよう改築されていた。

ただし、町の会館やホテルで行なう場合と異なり、祝賀会の司会をはじめ、ボーイや音響係等、一切の進行を発起人となった職場の同僚が行っていた。余興も社内のバンドや蝦夷太鼓同好会のメンバーらが出演し、何から何まで手作りの祝賀会で、新たな門出を大勢の人に祝ってもらったイベントであった。これは本州製紙の他工場や他社にはない慣例であり、「これが釧路工場の結束力の強さの源ではないか」とA氏は語る。このスタイルの結婚式は若年従業員の減少とともに昭和の終わり頃には見られなくなる。

(9) レストラン「赤トンボ」

工場前には、本州製紙と三ツ輪運輸、東京銀座のレストラン「赤トンボ」の共同出資で同名のレストラン「赤トンボ」が開店し話題となった。もともとは、工場の

来客応接用の飲食施設が市内まで行かなければならず不便であったため設立したとされる(釧路製紙工業史研究会 1990, 438-439)。工場関係者の消費需要が工場の外に生み出した商業施設の一例である。なお、同店は1992年(平成4年)に撤退した。

4-2 従業員の妻と子どもの社宅生活

A氏夫妻が結婚し入居した社宅の各戸は、10帖と6帖2間の2LDKであり、全戸スチーム集中暖房、浄化槽式の水洗トイレ、そして都市ガスも完備しており、当時としてはかなり文化的な生活であった。地下には自転車置き場、32戸共同の風呂、お湯が使い放題の洗濯室、乾燥室があった。これらはすべて工場からのスチームを利用したものであった。電気代は会社が一部負担し、1棟全体の合計額を均分して算出していたため、棟内一律の金額だった。そもそも各戸に電気メーターや水道メーターは付いていなかった。水道代は家賃に含まれているため、支払うのは電気代、ガス代、家賃のみであった。

B氏は、結婚してから退職するまでのA氏の給料明細をすべて保管しており、一軒家へ転居するまでの10年間の社宅の家賃や電気代などが分かる。1974年(昭和49年)時の社宅家賃は2,010円、電気代は1,740円であったが、1984年(昭和59年)時の社宅家賃は8,370円、電気代は3,743円であった。これらの数字を比較すると、電気代の増加が約2倍であるのに対して社宅家賃は約4倍にも増加している。これについてA氏は、会社が従業員の自宅所有を促すために徐々に値上げしていったのではないかと解釈している。

敷地内の自動車の制限速度は時速20kmに制限され、子どもが交通事故に遭うことはほぼ無かった。未就学幼児は幼稚園や遊び場が身近にあるので敷地内から出て遊ぶ必要が無かった。人の往来も多く顔見知りも多いため、B氏も自分の子どもがどこで遊んでいるのかを他の社宅住民からたびたび知らされた。

B氏は、1950年(昭和25年)に釧路で生まれ、1974年(昭和49年)にA氏と結婚、同年より社宅に住み始めた。社宅に住み始めたころは、周りにも新婚家庭が多くなじみやすかった。周囲の家庭の子どもたちもA氏夫妻の子どもとたちと同年代であった。

大阪出身の転勤者夫妻が社宅に引っ越してきた際には、すぐには馴染めないだろうということで、B氏がその夫婦の妻と積極的に会話し親しく交流した。ある時にはその夫婦の妻とお互いの子どもを連れて、大楽毛海岸でハマボウフウを採りに行ったこともあった。この夫妻の夫はA氏の上司であり、塗料の「先生」と呼んでいた。後にこの夫妻の妻から君子蘭の鉢植えを分けてもらい、今でも育て続けている。また、今でも年賀

状を通じた交流が続いている。

社宅の住民同士で大楽毛海岸へ遊びに行ったり、社宅裏の原野へギョウジャニンニクなどの山菜や、スズランやリンドウなどの花を採りに行く交流があった。

社宅各棟には32戸分の部屋があり、階段が4つあり、各階段につき8戸分の部屋があった。夜には子どもを連れて、夫が夜勤のため不在である同じ階段の家庭に料理を持ち寄り集まった。広島出身の主婦に広島風お好み焼きを教えてもらったこともあった。

当時は全国各地からの転勤者があり、様々な地域の文化や個人々の趣味嗜好の交流が盛んであった。

また、工場には様々な分野の専門家がいた。A氏一家の隣に住んでいた従業員は、大抵の家電品の修理ができ、映らなくなったカラーテレビを部品代の数百円だけで修理してくれたこともあった。

社宅各棟の前には花壇があり、チューリップや芍薬などを植えていた。この花壇のレンガにD氏が転んで頭を打ちつけ、大けがをしたこともあった。この時は診療所で処置してもらったが、診療所では治療が難しい眼科や耳鼻科などへの通院は、市内への通院バス（マイクロバス）が平日の朝に工場から出ており、市内の病院の入口まで送ってくれた。帰路は自分で手配しなくてはならなかったが、B氏の父が個人タクシー運転手だったため、社宅まで送ってもらっていた。当時のバス運賃は高額であったため経済的に助かった。B氏は運転免許を持っていたが、ペーパードライバーのため運転はせず、市内へ行くには不便であったものの、社宅では概ね暮らしやすかったと回想する。

C氏は1975年（昭和50年）に生まれ、小学校4年生時に転居するまでの10年間を社宅で暮らした。

C氏が小学校へ入学した1981年（昭和56年）当時、社宅から小学校への通学路は国道沿いの歩道ではなく、工場敷地内を通過していた。これについてA氏は、国道沿いの歩道はチップ運搬車が頻繁に通過しており危険であったためだとする。通学路の途中には屋根付きの休憩所があり、雨宿りができた。しかし、この通学路の真横には工場の排水路が平行して流れているという問題があった。間の距離は10m程あったというが、排水路沿いに柵は無く、今考えるとぞっとする、とC氏は語る。幸いなことに転落事故はなかった。社宅の子供たちにいたずらっ子が少なかったからではないかとC氏は語る。入学の翌年には、国道沿いに歩道橋が設置されたため、この通学路は廃止された。

社宅の敷地内では習い事もできた。独身寮の管理人が寮の空き室を利用して書道教室を開いており、C氏とD氏は姉妹で通っていたという。月謝も安く、多くの子どもが通っていた。

D氏は1977年（昭和52年）に生まれ、小学校1

年生時の転居までの7年間、社宅で暮らした。

夏のバスハイクで、和琴半島や浦幌森林公園へ行ったり、霧多布で地引網体験をするなどしたほか、年中同年代の子どもたちと遊んでいたという。

今ではなかなか考えられないことであるが、社宅の敷地内ではよく現金を拾ったという。五千円札や一万円札を拾ったときに本州ハイマートへ届けたところ店員が半額だけくれたことを記憶している。

社宅に暮らしていた時期は幼かったため覚えていることはあまり多くないが、寝ている顔の上をゴキブリが這っていったことと、台所に設置してあったゴキブリホイホイが強烈に印象に残っている。釧路にはゴキブリは生息していないはずだが、道外からの転勤者の荷物などととも卵が持ち込まれ、それが社宅内で繁殖していたと見られる。棟内はスチーム暖房で冬でも暖かったため社宅に住みついてしまっていたのである。駆除するために、定期的に社宅の全部屋を開け一斉に殺虫剤（バルサン）を噴射していたという。

5. 社宅外転居と王子製紙合併

5-1. 社宅外転居

A氏一家は、1984年（昭和59年）、工場から3.5kmほど離れたW地区に持家を購入し、10年間住み慣れた社宅から転居する。徒歩通勤から自動車通勤に変わったが、通勤時間を考えると通勤の負担はそれまでとあまり変わらなかった。転居当時、新居近辺には住宅が少なく、空き地が広がっており、晴れた日には雌阿寒岳が見えるほど建物が少なかった。

家計面で一番変わったのは光熱費と水道料金であった。今まで会社が一部負担していた電気料金、社宅家賃に含まれていた水道料金、「タダ」で使い放題だった暖房費など社宅ゆえの恩恵が一挙に失われ経済的負担が増した。ただし、釧路工場は燃料手当が支給されていたため、増加した光熱費がある程度相殺され実質的な負担の増加は大きくはなかった。本州製紙では、この手当は北海道にのみ存在し、灯油2,000ℓ分の手当てが支給された。A氏は小さい頃から石炭ストーブで育っていたので、転居時は石炭ストーブを購入して使用した。灯油ストーブに替えたくっかけは、1993年（平成5年）1月に発生した震度6強の釧路沖地震だった。この時、A氏は必死で石炭ストーブを押さえていたという。1994年（平成6年）10月にも震度6強の北海道東方沖地震が発生したので、灯油ストーブに換えて良かったとA氏は考えている。

転居直後に見られたゴキブリも、ひと冬過ぎると全滅していた。ある時、タンスの裏でゴキブリの卵の残骸を見つけて以降、ゴキブリを見ることはなくなった。

工場の近隣地域に転居した従業員家族は、A氏一

家だけではなく、多くの従業員が持家を購入し転居しており、現在も近隣地域の町内会役員は、現職・退職問わず多くの従業員が引き受け、地震、津波などの災害対策にも熱心に取り組んでいる。最近では、津波時の避難経路の見直しにより、釧路新道高架につながる避難階段が設置されたほか、社宅の屋上を利用した避難場所の提供について釧路市と協定を結んでいる。

C氏はW地区に転居するにあたって、X小学校からY小学校へ転校することとなった。X小学校は本州製紙の児童が多かったため、親しい友人が多く平穩に過ごせたが、Y小学校ではZ地区から来ている児童が多く、そうした児童から、言葉遣いや服装について、よく揶揄されたという。Z地区の子どもたちの言葉はC氏にはなじみづらいものであった。服装に関しても、Y小学校では女兒でもスカートを履いていくと目立ってしまうなどX小学校とは雰囲気異なっていた。

本稿の聞き取り調査対象者は、いずれも当時のZ地区に対して肯定的印象は持っていない。X小学校は親が本州製紙で勤務している児童が多く、経済面や教育面についてもあまり差がなかったため、C氏は転校先での差異に当惑することとなったと考えられる。

5-2. 王子製紙との合併

本州製紙と合併する際の王子製紙は、すでに旧王子系の神崎製紙や日本パルプ工業とは合併済みであった。王子製紙の研究設備は、本州製紙には無い物が多数あった。特に旧神崎製紙の尼崎研究センターには実機に近い大型の印刷機械があったため、開発した新製品のテスト印刷ができた。そのため製品を市場に出す前に評価できたので、「これは本当に良かった」とA氏は回想する。このように、大合併によって各社が持っていた研究設備を共有できたことは、技術畑の者にとっては大きなメリットと映った。

合併後には工場間の技術交流もあった。釧路工場からは新製品の開発やコストダウンのために開発した技術を提供し、多くの工場で共有することができた。また、転勤による人事交流でお互いのノウハウをさらに深化し共有することもできた。

合併から3年後、工場長が王子製紙出身者に代わり、徹底的な経費見直しが始まった。その結果、福利厚生施設では「こぼと幼稚園」と「社員クラブ」の廃止が決まった。さらにレクリエーション行事もすべてなくなってしまった。この頃は社宅の居住者も徐々に減少していたため、仕方ない部分はあるものの、「やはり新しい風が入ってきたか」とA氏は感じた。

その後、A氏が退職する少し前には本州ハイマートも地域住民に惜しまれながら閉店し、「本州」と名の

つく施設はすべてなくなってしまった。現在、従業員や家族が楽しめるイベントは2008年(平成20年)頃から始まった「王子夏祭り」だけが残っている。

6. おわりに

本稿では、本州製紙と王子製紙の釧路工場に勤めた元従業員とその家族計4名に対する聞き取り調査から、1960年代から2000年代にかけての釧路の製紙業従業員およびその家族の経験の一事例を示した。

厚生施設や社宅生活に関してはA氏一家の記憶を中心に記述した。このため聞き取りにおいて個別に言及されなかったことから本稿では述べていない事柄もあるが、それらについては、釧路製紙工業史研究会(1990)などの先行研究を参照されたい。

本稿は事例研究であるから一般化を行なうことには慎重であるべきであるものの、産業社会史という観点から本稿が提起できることを以下で述べておきたい。

近代の都市においては、生産の場と生活の場が分離し、公的領域と私的領域も分離することが一般的である。たとえば、新興住宅街ではたとえ地域活動が活発であったとしても、各世帯は職場も職業も様々であるし、たとえ家族的な企業であっても従業員たちの居住地域は様々である。これに対して、本州製紙釧路工場は、生産施設や居住施設、企業体制も近代的なものでありながら、生産の場と生活の場、公的領域と私的領域が結合するような一種の「共同体」を形成していた。このことは、A氏一家の語りの中にも表われていた。

A氏は、本州製紙釧路工場における職場生活についての語りの中で、従業員同士の連帯感を強調したが、そうした連帯感は、三交替制やトラブル対応など単に業務内容のみから生まれるものではなく、また、従業員間にのみとどまるものでもなかったと言える。

本州製紙釧路工場は、釧路の市街地からは離れており立地上は便利な場所ではなかった。その具体例は、B氏の語りの中にも現われている。A氏は、従業員の定着のために本州製紙が施設や行事など福利厚生に力を入れたと解釈している。実際、従業員であるA氏に限らず、A氏の家族の語りにも見られるように、従業員家族も社宅生活における一体感を強調している。

一方で、こうした「本州村」を核とした「共同体」は、1980年代の一家の社宅外転居と、その約10年後の王子製紙との合併によって失われたものとして語られる。転居は生産の場と生活の場の地理的分離、合併は公的領域と私的領域の分離として認識されていると言えよう。それは翻れば、工場と社宅が、生産と生活、公と私が生じた生活空間、古典的な意味での「共同体」(岩本1979)の擬似体を形成していたことを、転

居と合併が当事者たちに再認識させたとも言える。

「本州村」が完全に外部から孤立した生活空間ではなかったことは、語りの中からもうかがえるが、C氏の転校時の経験は、社宅が周囲とは異なる文化空間を形成していたことを物語っている。A氏夫妻は地元釧路出身であったものの、社宅内は出身地などが異なる人々が集っており、より平均的で標準的な言葉遣いや文化が形成されており、それを身につけていたC氏にとっては、均質でありながら地元色の強いZ地区の言葉遣いや文化との間に、差異を見出したのである。

本稿における聞き取り調査においては、「共同体」での生活は肯定的面ばかりが語られていた。実際には、負の側面があったことは想像に難くないが、そうした正の側面ばかりが優先的に語られること自体に「共同体」への喪失感が表われていると言える。それは同時に、「共同体」が懐旧すべき要素を持ち、自分たちの生活の質の向上や保障につながっていたと当事者たちが認識しているということでもある。

太平洋炭砒社員や家族の語りに加え各種資料からその生活史の変遷を論じた笠原良太(2018)の研究と本稿で得られた知見を比較してみたい。

まず、「一山一家」に象徴されるような炭砒住宅における生産の場と生活の場の一体化は、本州製紙釧路工場の「本州村」も同様であり、それに加え、光熱費や家賃の負担が軽減され経済面で恵まれていたことが認識されていること、そして持ち家の普及で一体感が解体していくとともに、かつての炭砒住宅生活が懐旧の対象になっていく過程も共通している。

一方で、炭砒において職員・砒員・下請けなどの間の階層差が住環境面で顕われていたことや、その階層意識が子どもたちにも反映していたという点は、本稿の聞き取り調査の範囲では本州製紙釧路工場の場合は認められなかった。ただし、社宅外への転居後に実感した周辺地域との文化差や階層差は語られていた。

笠原(2018, 83)は、太平洋炭砒では持ち家世帯の増加や周辺の市街地化により炭砒関係者の子どもとそうではない家庭の子どもが混在して同じ学校に通うようになることで、「炭砒のこどもたち」が「釧路のこどもたち」へと変わったと論じているが、C氏の事例ではむしろ社宅外転居がかつて自分が〈社宅のこどもたち〉であったことをC氏に認識させている。

製紙業が、地域経済へ与えた影響力はもとより、集団的一体感の形成や、それが住民に与える生活の質が地域社会や個々人の〈生〉に大きな影響を与えたと考えられる点は見落とすべきではないであろう。

より多くの事例が集まることで、本稿が提起した知見や新たな事例から得られた知見が検討され「産業社会史」の知見として一般化されることが望まれる。

引用文献

- 石川孝織・2016. 阿寒硫黄砒山に関するノート：砒山技師・青井祐一氏の証言より．釧路市立博物館紀要，36: 41-48.
- 岩本由輝・1979. 共同体論争をめぐる．経済評論，28(12): 124-135.
- 王子製紙総務部社史編纂室本州製紙社史編纂委員会(編)．本州製紙社史：48年の軌跡．1999. 王子製紙株式会社，東京．
- 大門正克・2017. 語る歴史、聞く歴史：オーラル・ヒストリーの現場から．岩波書店，東京．
- 笠原良太・2018. 太平洋炭砒での暮らし．太平洋炭砒：なぜ日本最後の抗内掘炭砒になりえたのか(下)(嶋崎尚子，中澤秀雄，島西智輝，石川孝織編)，55-90. 釧路市教育委員会，釧路．
- 釧路製紙工業史研究会(編)．1987. 釧路の製紙(上)．釧路市，釧路．
- 釧路製紙工業史研究会(編)．1990. 釧路の製紙(下)．釧路市，釧路．
- 嶋崎尚子，中澤秀雄，島西智輝，石川孝織(編)．2018. 太平洋炭砒：なぜ日本最後の抗内掘炭砒になりえたのか(下)．釧路市教育委員会，釧路．
- 嶋崎尚子．2020. 「つながり」の戦後史：尺別炭砒閉山とその後のドキュメント．青弓社，東京．
- 日本製紙釧路工場100年史編集委員会．2020. 日本製紙株式会社釧路工場100年史．日本製紙，釧路．
- ニュース釧路編集部．1977a. 木下又三郎相談役ご逝去さる．ニュース釧路，200: 無番．
- ニュース釧路編集部．1977b. わたしのりれきしよ39 診療所所長 中野征紀．ニュース釧路，208: 13.
- ニュース釧路編集部．1978. 中野征紀先生ご逝去さる．ニュース釧路，212: 8-9.
- 本州製紙株式会社釧路工場．1969. 10年のはばたき．本州製紙株式会社釧路工場，釧路．